## マンツーマンディフェンスの基準規則（2022年度改訂・2023年度施行）

### まえがき

**〔2022年改訂に至る経緯と改訂の目的〕**

2015年からのマンツーマン推進の取り組みについて、U12においては「1989年ゾーン禁止の取り組み、その後撤廃」の過去を踏まえて厳格に行ってきた。また「マンツーマンディフェンスを指導する」という「教育的な意味合い」を持たせたことにより、黄色旗の上がる回数がU15より多くなった。黄色旗を頻度高く上げる取り組みは、マンツーマン推進浸透に貢献をしたが、一方で子どもたちへのプレッシャーやマンツーマンコミッショナーの判定基準統一の難しさ等の課題が浮き彫りとなった。

これらの経緯を踏まえ、「マンツーマン推進は、子どもたちの将来を見据えて継続する」が、U12において「子どもたちがバスケットボールを楽しめる環境作り」を再考し、「バスケットボール本来の在り方に近づけること」を目指すことを改訂の目的とする。

この改訂により、ゾーンディフェンスを許容する事に戻るのではなく、子どもたちの成長のために、将来を見据えたバスケットボール環境構築に向けて、指導者・保護者・関係者が一体となって進むことを望みたい。

**〔マンツーマンコミッショナー設置の目的〕**

マンツーマンコミッショナー（以下、「コミッショナー」）設置の主な目的は、マンツーマンに対する理解を推進し、円滑に試合運営を行い、子どもたちがよりバスケットボールを楽しめる環境を構築することであり、試合における違反行為を取り締まることではない。

**〔マンツーマンディフェンスとは〕**

① マッチアップが5人共に見られること。
② スイッチは可能であるが、エリアを守り続ける目的のスイッチは許容されない。
③ オンボールディフェンスは、マッチアップし、ボールマンのシュート・ドリブル・パスを制限しようとすること。
④ オフボールディフェンスは、マークマンとの関係により、ポジショニング・ビジョンを取ること。ヘルプ、トラップ、ローテーションが発生することは可能とする。





## マンツーマンディフェンスの基準規則（2022年度改訂・2023年度施行）

⑤ マッチアップの状況からポジショニング・ビジョンが適切ではない状況が生じた場合、組織的、意図的でなければ個人のミス、技術不足、判断であると見なして、瞬間の現象を捉えるだけではゾーンディフェンスであるとは見なさない。
⑥ マッチアップの状況からトラップが生じた場合、ゾーンディフェンスをしているとは見なさない。但し、これを意図的、組織的に連続して行う場合は目指すマンツーマンディフェンスではない。（スクランブルディフェンス状態）

**〔ゾーンディフェンスとは〕**

① ディフェンスプレーヤーが特定のマッチアップを意識せず、組織的、意図的にエリアを守ること。
② マークマンの動きに対して、適切なポジション対応をしていない（例：マークマンについていかないこと）状況が継続的に行われていること。
③ マークマンの動きに関係なく、ボールマンを守り続ける状態。
④ 隊形を問わず、5人・4人・3人・2人・1人がエリアを守るもの
⑤ マッチアップが明確ではない状態が続くディフェンス（例：トラップを続ける中で途中エリアを守る等）

マンツーマン推進リーフレット第４版
（※2023年４月１日改訂版）
なぜマンツーマンが必要か？【JBA】から抜粋

# マンツーマンの判定基準の解説

### Ⅰ. マンツーマンディフェンス導入の前提

①子どもたちがバスケットボールを行う楽しさを担保することが大前提である。
②マンツーマンディフェンスを行う事が大前提である。

### Ⅱ. 判断基準

①MCは「ゾーンディフェンスをしていると判断」した場合に「黄旗」の警告を掲げ、改善されない場合は「赤色旗」を上げる。

### Ⅲ. 黄旗と赤色旗の意味

①これまでは「教育的な意味」であり、「理想的なマンツーマンディフェンスの状態以外であれば、瞬時な状況を含め、全て違反行為とみなし」黄旗をあげることとしていた。これからは「警告的な意味」とし「ゾーンディフェンスをしていると判断した場合、赤色旗に移行するまでの警告として」黄旗をあげることとする。
②明らかなゾーンディフェンスである(と判断される)場合に赤色旗となる。ゾーンではないがマンツーマンとも言い難い状況がある場合は、これまでは黄旗対象であったが、積極的には黄旗をあげない。予測に基づくプレーを許容するためである。
③ただし、勝利を目指すことを優先するなどの考え等で指導者は、「予測に基づくプレーを許容」を悪用するべきではない。
④黄旗を頻繁にあげることで子どもたちがゲームに集中しにくくなり、楽しめなくなる環境は望ましくない。この改善のために黄旗を使う適応意図を変更するが、指導者・保護者・関係者一体となって寛容な精神を持って子どもたちのプレーを見守る姿勢が必要である。

### Ⅳ. スイッチ

①スイッチは可能であるが、エリアを守り続ける目的のスイッチは許容されない。オフボールディフェンスにおいてスイッチを許容することはゾーンディフェンスの意味合いに繋がるためである。
②マッチアップを交換する目的でのスイッチは許容される。





# マンツーマンの判定基準の解説

### Ⅴ. トラップ

①U12世代ではトラップは推奨しない。U12世代でトラップを積極的に用いることの目的は何であるのか、指導者はじめ関係者は考慮する必要がある。
②U12U15両世代において、ボールを保持している選手への全ての場面においてトラップは許される。
※「マンツーマンディフェンスの基準規則」および「マンツーマンディフェンスの基準規則の補足解説」におけるトラップの定義：ボールをスティールできる距離における数的優位な守り方

### Ⅵ. 予測に基づくプレー

①マンツーマンディフェンスを行なっている前提において、2022年度の改訂によりU12U15両世代にて、予測に基づくプレーとコミッショナーが判断した場合、基準規則違反とは見なさない。
②予測に基づくとは、予測の根拠となる動きがあることを示す。
③マークマンを意識せずにエリアを守ることはマンツーマンの趣旨に反するため許されない。
④ディフェンスはマッチアップを前提として自分のマークマンのプレーを守ることが原則である。

### Ⅶ. アイソレーションオフェンスを行っていると判断する場合

①アイソレーションオフェンスとは「一人のボールマンがドリブル攻撃を継続的に続け、残り4人のオフェンスは意識的にオフェンスに参加しない状況を示す」
②オフェンスが動かないのでオフボールディフェンスのポジション移動が起こらないことはゾーンディフェンスと見られがちであるが、オフェンスが人とボールを動かすプレーを選択しないことに起因するため、自分のディフェンスを捉えていれば常に移動しなくてもよい。
③指導者は、オフェンスにおいて人とボールを動かすことでスペースを創り出していくことを考えるべきである。また、子どもたちの発育発達段階を考慮した適切な指導が求められる。

### Ⅷ. ヘルプディフェンス

①マンツーマンからのヘルプは許されるプレーであるが、マークマンを意識しない動きをとり続けるように指導されている状態は、マンツーマンと言い難く、プレーヤーが学ぶべき基本を逸脱するものである。